

## 公爵と男爵

二年 蛭谷佳奈

私たち家族には二匹の愛犬がいました。「デューク」と「バロン」です。デュークは私が生まれる前に亡くなってしまい、会ったことはありません。だけど、写真を見るといつも祖母の隣にいて、みんな幸せそうでした。そんなデュークは今、仏壇で私たちを見守ってくれています。

私が生まれる少し前にバロンがやって来ました。バロンは一度も吠えたことがなく、小さかった私が毛を引っぱったり、食べたりしても何も言わずにずっとそばにいてくれました。私が寝ていると、そっとそばに来て一緒にいてくれました。あのときの温もりは今でも覚えています。

そんなバロンが「白内障」になりました。視界が悪いため、目やにがたくさんついて、散歩も行けなくなり、「飯を充分に食べることも難しくなりました。」

バロンは一日中ぐったりして、家の中を歩くこともなくなりました。それでもバロンは祖母から離れずにいました。私が三年生のある日、その日は突然来ました。

「佳奈、起きて。」

「どうしたの？まだ眠いよ。」

「いいから早く来なさい。」

ただ事ではないと思ひ母について行った先は祖母の寝室でした。バロンは祖母と同じ部屋で寝ています。私は一瞬、嫌な想像をして、「そんなはずない」と首を振り、部屋に足を踏み入れました。

そこには横たわるバロンがいました。バロンを囲むようにみんなで座り、一言も発さずにただじっと、バロンを見つめていました。きつと家族全員が同じ思いで、バロンを見守っていたと思います。

バロンはうつすら開いていた目を閉じ、おだやかな顔で息を引き取りました。

私は突然のことに、バロンがこの世を去ったという現実をのみこめませんでした。ようやく理解できたころには、ぼろぼろと涙が流れてきました。その日は家でも、学校でも、何にも手がつきませんでした。

あれから五年後、中学二年になった私は、ふとグーグルで「デューク」と「バロン」の意味を知りたくなりました。「公爵」と「男爵」。二つの名から、祖母の込めた愛情や喜びが感じられました。

今はもういないデュークとバロン。二匹は「公爵」、「男爵」と呼ぶにふさわしいと確信しました。二匹がいたからこそ私たちの家は明るく、幸せでした。二匹からたくさん愛と幸せをもらっていたのです。亡くなった命は戻らないけど、二匹の記憶は残ります。私は、今までもらった愛や幸せを家族や今生きている動物に返したいです。

犬と人、種は違うけど同じ世界を生きるのだから、対等で互いが幸せになれる関係を築いていきたいです。